

大村はま教室の「自己を育てる」教育の成熟とその成果

橋 本 暢 夫

一

大村はま先生の実践は、「人は一人では育たない。」「人はお互いにだれかを育てながら生きていくものですし、なにより自分を育てながら生きていくものです。」「(諏訪こそわが根)一九八三年講演」との人間観にたち、一人の日本人として民主社会を生きていく基本的な力を、主体的な学習を通じて、学習者一人ひとりの身につけさせていこうとする「理念」のもとに営まれてきた。「理念」ゆえに、いつ、いかなる学習者に対しても、それぞれの個人差に応じて、創意・工夫のこらされた学習の「実の場」が創りだされてきた。

先生は、一人ひとりの学習への意欲を喚起し、「学び方」を自得させ、自己を確立させ、個性を発揮させていかれた。大村単元学習においては、学習者一人ひとりに学習目標を達成させつつ、先生ご自身のなかでは広く深い識見のもと、国語学力・国語学習力が見通されていて、指導の目標、内容、評価が重層的に構造化され、螺旋状にたかめられてきた。

二

大村はま先生の実践の基底は、一人ひとりの学習者の実態把握の上に立った的確で細密な目標の設定と学習者の自己評価力の育成におかれてきた。

ここでは、戦後、新制中学校に移られてからの実践を「自己を育てる」教育の視点からとりあげて考察する。

目黒第八中学校における、一九四九(昭和二四)年度と一九五〇年度の、大村教室(第二学年と第三学年)の学習を原倭子^(注)さんは、十冊の学習記録として残している。

- 1 早春と短歌と俳句(詩歌の学習) [二四年度一学期]
- 2 実用的な手紙の書き方 [同 一学期]
- 3 級雑誌の作り方 [同 二学期]
- 4 読書 [同 二学期]
- 5 私たちはどれだけのことを身につけたらよいか [二五年度二学期]
- 6 読書の技術 [同 二学期]
- 7 古典入門 [同 二学期]

8	地蔵の話	〔同〕	三学期
9	どうしたら正しい読み方書き方ができるか	〔同〕	三学期
10	国語の改良	〔同〕	三学期

ここでは、原倭子さんが残した学習記録のうち、一九四九（昭和二四）年二学期の単元「クラス雑誌の作り方」（九月二日～一〇月一四日）、及び単元「読書」（一〇月一七日～十二月一日）の学習について取り上げる。

単元「級雑誌の作り方」の学習記録の「目次」、及び「学習のめあて・計画」は次のようになっていいる。

「級雑誌の作り方」

○目次

学習日記（例プリント・筆者注）	1
学習のめあて・計画	6
他校の雑誌についての研究	7
練習	9
クラス雑誌の案	15
プリント	19
読書感想	23
1 山の力	23
2 兄弟	24
3 清兵衛と	25
4 秋の日	26

5	少年の日の思い出	28
6	トロッコ	27
7	少年	29
8	犬ころ	31
	会話をとらえる	32
	プリント（1）	36
	新当用漢字	37
	テスト プリント	48
	研究「八つの作品の主人公の性格について」	50
	クラス雑誌 第一号案	56
	後記	57

○一、学習のめあて（抜粋）

- 2、クラス雑誌の作り方を知る。
- 3、いろいろの目的と場合に応じて必要なものを読んだり、書いたり、また人に会ったりすることを気軽に
にする態度や習慣を身につける。
- 5、いろいろのものを読んで、批判する力を持つ。
- 7、いろいろの種類の文章を書く力をつける。
- 9、表記法や正しい語法についての力を増す。

○二、学習計画（抜粋）

- 1、他の学校の雑誌について研究をする。
- 3、クラス雑誌の特色は何であるか考える。

4、自分たちの雑誌は、どんなふうにつけていくか相談する。

5、分担によって資料を集めたり、作ったりする。

8、批評会をする。

細密に考えられ、工夫されたてびきによって各学習活動がなされていく。

この「学習記録」の「あとがき」には、「新聞とか雑誌を編集することによって、非常に国語の力がつく。それでこの単元をやつてとてもよかったと思つている。そして、別に学習が困難でなかった。が、そこまではよいとして、その先のしめくくり、つまり編集の困難が予想される。まだ編集はしていない。遠足・運動会の前に出したいが、それはよほどの努力が必要とされるだろう。」と記録されている。

クラス雑誌は、「巻頭言、詩（一）、先生の作品、作文（一）、娯楽のページ、研究、スポーツ、作文（二）、詩（二）、二A級のページ、手紙文、ラジオ、速記録、生活日記、世界ニュース、編集後記」の十六の記事・文章によって編集され、一九五〇年一月一八日に「たけ」と題して謄写印刷で発行されている。

この単元では、学習目標の「クラス雑誌の作り方」の技術・方法を身につけるために、まず内容が育てられる。そのために、次の手順で学習が進められている。

① 他校の学校誌の調査・研究。

② 話し合うことで、クラス雑誌の案を作る。

③ 内容としての読書を行い、感想を育てる。

④ 八つの作品の比較研究。

⑤ 作品中の「会話」への着目から「日常の会話・ことば」への自覚をうながす。

②の話し合いでは、会議の技術・方法の体得も図られる。また、⑤では語彙の拡充、ことばのきまりの学習が図られており、すべての学習の機会、場と繋がっている。

原倭子さんは、読書感想として「山の力」「犬ころ」など八編について感想を書き、「八つの作品の主人公の性格について」と題した個人研究を行っている。この研究は、大村先生との対話・助言によって進められており、視点が明確で感想に独自性がある。また、のちに「教科書に載せられている作品には生き生きとした・友達になりたい少年が少ない」と言われるもとなった研究である。

単元「読書」の学習記録の目次は次のようである。

単元「読書」(注2)

① 目次

I 目標 学習計画 プリント……………1

読書日誌……………2

II 標語（個人学習・筆者注）・読書新聞の企画……………5

読書感想……………7

地蔵の話……………8

III 読書新聞……………	10
---------------	----

その感想……………	23
-----------	----

読書感想発表会記録（その評価・筆者注）……………	28
--------------------------	----

プリント（一）の批評……………	30
-----------------	----

会議のプリント（一）……………	31
-----------------	----

「湯川博士」についての感想……………	32
--------------------	----

プリント（二）（話し合い・筆者注）の……………	33
-------------------------	----

自分の批評……………	33
------------	----

会議のプリント（二）「私たちの級雑誌」……………	34
--------------------------	----

放送の順序のプリント……………	36
-----------------	----

自治会「教室の美化」の批評……………	38
--------------------	----

会議 各グループのコンクール メモ……………	39
------------------------	----

批評・評価表……………	40
-------------	----

放送後の感想……………	44
-------------	----

IV 書取……………	47
------------	----

V 学習日誌……………	55
-------------	----

*ローマ数字は、学習活動の整理のために筆者が付した。

単元「読書」の目標としては、次の八項目が記録されている。

1、次の文章を理解しつつ早く読む。

①、少年の日の思い出（以下、一七編）

2、文をどんなふうに使えばよいか知る。

3、早く読むふうのしかたを知る。

4、読んだことをかたんにまとめていく力を増す。

5、読んだことについての自分の感想をとらえて書く習慣と力をつける。

6、読書の習慣を身につける。

7、語いを増す。

8、自分の意見を持ち、他の人の意見との異同がはっきりわかるようになる。

「読書新聞 第二号」の企画案として、「第二号感想、読書感想、読書調査、本のしょう介三冊、みなさんにぜひよんでもらいたい本の話、病気や家庭の事情で学校に行けない子供たち、漫画・娯楽」が記録されている。また、記事の割り付け図も表示されている。

単元「読書」は、文章一七編を理解しつつ速く読むことが目標の1として掲げられている。読書新聞の編集・発行を目標に速読のコツや読書生活の基底、討議の技術・方法が育てられていく。

読書生活指導の目標が、読書新聞の編集と作成という「実の場」のもとに、企画・記事の種類「内容」が、まず話し合われる。そのうえで一号／八号が発行されている。さらに、学んだこと、考えさせられたことを生かしていく方向が、その立場にたった「感想・意見・批評」として記されている。

「読書感想発表会」を記録した29ページには、「①もし私が議長（批評会のこと）になったら／イ 私の意見を書いておく。／口 議事の運び方、一人一人の意見の内容や言うべき場所、ことばづかい、全体のようす という順序をさめる」などとある。④

には、「先生の順」として「1、一人一人の発言がよい位置か／2、前の内容／3、ことばづかい」と、指導された内容がメモされている。また、「運び方について意見なのですが言ってもいいでしょうか、」という、「もう少し題を小さく限定してほしいと思いますけど」など、場に応じた（議題が悪いので意見に深みがないとのメモもある）指導がなされている。すなわち、学習のプロセスがそのままことばの生活を育て自己を育てる態度の育成になっている。

この単元では『批評』の語が用いられているが、「てびき」と学習内容を考察していくと、前ページ（下段21行目）の①にみられるように、相互批評の形をとりながら、内実は自己をみつめさせ、自己評価力を育成していく学習となっている。

また、個を生かすために、適切なグループが編成され学習活動が進められていく。

実践現場では、現代の「制度」や「学習の方法」に目が向きがちであるが、学習の内実を捉えるには、このような「学習の記録」を分析し、学習者の反応を捉えることが必要となる。

前単元「クラス雑誌の作り方」の学習において、原倭子さんは、八つの作品の読書感想を書きあげ、また、個人研究として「八つの作品の主人公の性格について」をまとめている。それは、この単元「読書」における、「読書新聞」の記事として活用された。

「読書生活指導」の中核としての「読書新聞」のモデルは、目黒八中の二年・三年生の新聞をもとに、一九五二（昭和

二七）年の『中学総合国語』（教育図書）にあげられている。（『大村はま国語教室 別巻』二五六ページ・二六〇ページにも）これらにはさらに工夫が重ねられ、『国語 一上』（西尾実編 筑摩書房 一九五六年）における画期的な「単元『新聞』」の一部としてまとめられた。^{（注3）}

三

「編集」は、ふつう「資料を集め、選択・整理し、まとめ・編む」意味で用いられる。大村はま先生の場合は、目的に応じて、あたらしい作品・文章を創る基礎力を身につけさせながら、内容・媒材を育て、産み出した言語表現体を整理し、まとめ・編む技術・方法を体得させ、生涯に涉って生きた場で活用できる態度を育成する意味で用いられてきた。

先生は、まず新聞の内容を創るために、記事・作品の産みだし方「読み・メモし、話し合い（討議・インタビュ・座談会）を記録（速記も）し、推敲する（相互評価の）方法」を身につけさせられる。その過程において、思考力を育て、自己をみつめさせていかれる。内容を創る学習（内容を産み出す技術・方法の指導）が「自己を育てる」教育の基底にある。

このようにして創り出された記事・作品は読み手にとって読む内容であるとともに、自己（表現主体）にとっても自己の課題を発見する対象（言語表現体）である。このような「実の場」を契機として、学習者一人ひとりに自己を評価し、自己の課題

を克服していく（自己を育てる）態度を先生は育てていかれた。こうした学習を学習者がどう受け止めたかは、後年の記録として次節で挙げる。

四

産み出された内容・記事―主張・論説・解説・調査・研究・インタビュー記録・創作・漫画など―を選択し、整理・配列し、編むてだてと意義を体得し、同時に協同学習の意義をも体得した学習者たちは、「新聞・雑誌・文集」のみならず、時事性をもった現代に触れる媒材（学習材）「後の「知ろう 世界の子どもたちを」「外国の人は日本（日本人）をこのようにみている」など」を集め、優劣を超えて学び合う技術・方法と、その時その場での課題を克服していくすべと意義を獲得していく。こうした発動的な自己学習態度の具現として、複数の資料・作品の選択または、配列によって一つの意図をもった創作物・媒材を創り出す例を示してみせられる。たとえば、文集「たけ」「大草原」、学校誌「石川台」、一九六九年からの単元学習資料などであり、「個人文集 私の本」はこの極北である。「自己を育てる」態度を育成していく契機をここにも見出すことができる。

「新聞」の編集という「実の場」での細密な目標のもとに、対話（討議）による問題の解決と、内容を産み出し、選択し・編む技術・方法の指導、あわせて常に語彙を豊かにしていく配意がなされることによって、学習者には、自己をみつめ、自己を評価する機会が数多く設けられ、自己啓発・相互啓発がなされていく。問題解決とともに、問題発見のための機会・場が意図的に練りあげられている。「自己を育てる」教育の成熟して

いくすがたをこのようにとらえることができる。

一九四九・五〇年度に目黒第八中学校第二・三学年において、大村はま先生に指導を受けた学習者たちは、その後も機会があるごとに、先生を囲んでの学年会（三学級）を開いたり、鳴門教育大学の「大村はま文庫」を訪ねたり、京都・精華町の「私の仕事館」を見学したりしてきた。また、当時学んだ「編集の技術」を活用して、クラス雑誌「はまたけ」の発行を重ねてきた。表紙・装丁は、天野政雄画伯が、編集は新聞博物館の羽島知之氏が、近況は、晩年おそばで先生のお世話をした豊重禎子さんが報告をしている。^{（注）}まさに「自己を育てる」教育の結実、「個が生きる」成果である。以下に「はまたけ 七号」（おはま会二〇〇二年二月）から、三名の方の「大村はま先生に教えていただいたこと」をあげて、大村教室の成果をみていく。

○「打出の小槌」

（前略）

喜納 倭子（旧姓原）

今から五〇年以上前のこと、TVもなかった頃から、大村先生は独自の教育を貫いてきてくださいました。子どもたちの身になってという信念を、どれほど強く強く持っていてくださったことでしょう。今あらためて深く敬服し感謝いたします。

私にとって、大村先生の時間は「国語」というよりは「こん

なこともできるのだ」という意外性、別世界の体験の連続だったように思います。

・教科書は同じ班でも一人ずつ発行所が違う別の本。「そういう本もあるの?」

・ノートは一枚ずつの学習記録や資料を綴じて单元ごとにできあがる。「えっ」

・安寿の気持ちになつて母あてのお別れの手紙を書く。「遺書! どうしよう」

・シナリオを書くのに場面ごとに背景や音、登場人物が近づくとか静かに消えるとか思い描いていると、気分はすっかり演出家

・朗読の予習でラジオの〈私の本棚〉を聴いていると、しだいに榎村治子さんのとりこになって、将来の仕事として憧れたことも

・新聞作りでは「編集会議」という言葉に動かされて、時間内にはかどらなかつた打ち合わせの続きを、住友さんの店先でごちゃごちゃやりました(あの店は子どもを使いによつても良い品物を渡すと母が言っていた誠実なお父さんが、りんごを一つずつ前掛けで磨いて並べていらつしゃいました)

・会議の記録をマンツーマンで担当して、速記という特殊な仕事を身近に感じたり

・ラジオのニュースを聞き書きする宿題で、「慣れないうちは午後三時が家庭婦人向けでやさしいですよ」「こういうところで女は低く扱われている!」

大村先生の授業を通して、ほんとうに様々なことに目を開かれました。現実には添っているいろいろな可能性を感じさせていただきました。静かに確実に実践していらつしやるこの上ないモデル 大村先生に接して何か自分もという漠然とではあつても明るいものをいくつもいくつも感じて、恵まれた中学生だったとしみじみ思います。

社会に出てからの現実には厳しいのですが、先生から頂いた可能性はたくさんあるということ、静かに確実に歩みをすすめるということをいつも思いました。そして、大村先生ならばどうなさるのかなと考えるのが 打出の小槌 でした。四〇年余りの勤務を振り返ってみる時、先生から頂いたのは、大人になる、自分で生きる、自分を生かす、自ら考えて歩みをすすめる、そういう心構えの土台だったと思います。中学生という何ともつかみようのない年ごろの子どもにとつて、得点や遅い早いだけでなく、自分の可能性が感じ取れる体験をするならば、いつの時代だって幸せでしょう。久々に八中時代のページをめくつてそう思いました。

私のこれまで ①会社員 事務 三年

②中学校 理科教員 三四年

③図書館 事務 五年

④私立中学校 カウンセラー 三年目

○「大村先生から教えていただいたこと」

都築 暢之

大村はま先生が九五歳の現在でも、ますますご壮健で、ご講演やご執筆にご活躍されていることは、驚異であると同時に、先生に教えを受けた私達にとって大きな誇りでもあります。

このたび、大村先生の思い出という題目で中学時代のことを書くことになりました。正直なことを言いますと、中学・高校を通じて国語は私にとつて最も苦手な課目でした。大村先生に何度かお叱りを受けた思い出があります。しかし、最も身近で私に物の本質を考える大切さを教えて下さったのは大村先生だったと思っています。

夏休みの宿題に、「町を歩いて目につく言葉の使い方の誤りを一〇例(だったと思いますが)探してきなさい」というものがありました。看板などを見てたちまち集まったと記憶しています。ただ、その時思ったことは、言いたいことが伝われば看板などで細かいことをいう必要はないのではないかとということでした。しかし現在、私の周囲の若い医師がスポーツ新聞的な当て字を正しいと思つてカルテを書いている場合があり、やはり、日常簡単な事から言葉を大切にしていかなないと我々は国語を失い、更には先人の遺産を理解できなくなっていくのではないかと、今更ながら大村先生のお教えに敬服している次第です。大村先生の国語の時間で一番印象に残っているのは、グループ研究で森鴎外の山椒大夫を読み、その感想を発表しなさいという課題を与えられた時のことです。この物語は簡潔な文章で、

旅に出た母子3人が人買いに拐かされ、母と姉弟が別々に売られ、姉の安寿が弟を逃がして入水し、救われた厨子王が後に国守になり、母に再会するというものでした。大村先生からのテーマの中に、盲目になり鳥追いをしている母の気持ちを考えなさいというものがあったと記憶していますが、どのような感想を発表したのか覚えていません。ただ、守り袋の仏像が安寿と厨子王の可哀想な場面を救い、そして母の盲目を治したことに皆が「よかったね」という気持ちを持ち、そして仏像の存在がこの物語に不思議な力を与えているように思つたことを覚えて 있습니다。この「母の思い」はその後も私の気持ちの中に常に考える問題として残りました。私は父の影響で能に関心を持つようになりましたが、人買いを題材にした能「隅田川」を観た時など、シテの狂女の言葉・動作に何時の間にか山椒大夫の「母」を重ねていました。これも中学時代の気持ちの持続でしょうか。最近、母親が子どもを邪魔にして殺すという想像もできない恐ろしいことが起きています。このような報道に接し何故だろうかと考える時、私の気持ちは常に中学時代の大村先生のお教えに遡っていきます。そしてそれが自分の原点になっていることに気づきます。

自分の学生時代を振り返りますと、先生方が本当に身近な存在として親身になって指導に当たって下さったのは中学時代だったと思います。大村先生には自分というものを創っていただきました。大変感謝しております。今後、ますますご壮健で、ご活躍されることを祈念いたしております。

○「大村先生と『自分を表現すること』」

宇野 正威

本棚の隅に背表紙が茶色に変色した三冊の小冊子があります。私たちが中学時代に創刊した「平原」の創刊号、第二号と第三号です。何十年もの間本棚の一部を占拠していただけでした。今回、大村先生の思い出を「はまたけ」第七号に投稿してほしいと依頼され、ふと目を通すうちに、半世紀前のことがフラッシュバックのように私の脳裏に蘇り、この三冊を読みふけりました。

古いことですので定かではありませんが、大村先生が国語の授業の一環として、それぞれのクラスが全員参加して雑誌を編集し、発行することを指導されたこと記憶しております。そうして、これを契機に自分たちの校内誌を持つという機運が盛り上がり、クラブ活動の一つとして雑誌部が作られ、「平原」の発行に至ったわけです。田治見君、日南田君、森川君、浅井君らが中心となって活動していた頃のことを思い出します。そうして、昭和二〇年代の世相とそこらまだ初々しかった私たちの姿を思い浮かべました。伊藤君や原さんたちの古典研究会の枕草子と山椒大夫、創作遺書、の筆の運びには感心しました。小林君の疎開の話は私たち同世代の戦争体験を生き生きと描いています。私は集団疎開ではなく、いわゆる縁故疎開でしたが、栃木県の実奥の村でランプのもとで暮らした場面場面が走馬燈のように蘇ってきました。都築君の蜂の話には吹き出しました。しかし、スズメバチの巣を取り除こうとしたのであれば、相当

に危険な事ですので、危ない話でした。大橋君の暗黒大連を読むと、私たちの世代は実に多くのことを体験しており、後世に伝えたいことを多く持っているなと感じました。

昭和五〇年代のはじめ頃、八中の創立三〇年を記念して「八中の思い出」と題する同窓会の座談会が行われ、私は創立頃の一人として参加しました。十名ほどの同窓生と校長先生ら教諭の方たちとの座談会の記録が平原No.31に掲載されています。用紙も印刷もわれわれの頃と比べ隔世の感があります。内容も校内誌らしく、バランスのとれたものとなっています。われわれの時代に創刊された雑誌を継続し、校内誌らしくするには相当な努力も必要であったことと思います。しかし、その過程でこの雑誌が最初に持っていた性格は大幅変わったなという印象を持ちました。当初の「平原」は、生徒が主体となって、自分たちを表現することが目的でした。たとえば、その内容に貧しい点があっても、その表現に生硬さがあっても、自分たちの姿そのものを表現することが教育的に意味があったのであろうと思います。そのため、茶色に変色したガリ版刷りの「平原」には、われわれの中学時代がそのままの形で残されています。

大村先生の授業では、読書の仕方について相当に指導された覚えがあります。あるテーマ、たとえば雀は益鳥か害鳥かに関するいくつかの短い論文を読み、いずれかであるかを考察する、という高いレベルの読書の仕方も含まれていました。そうして、さまざまな場面設定をもうけ、たとえば雑誌や演劇を通じて自己表現する、座談会の場面で自分の意見を述べるなどでした。

先生の国語教室は、語られた話と書かれた文をより正確に理解する、自分の考えを話し言葉と書き言葉でより正確に表現するという本来の目的を、さまざまな方法と場面設定で徹底的に行う、であったと理解しています。言語の理解と表現というテーマは私の専門領域である精神医学とも関係が深いだけに、先生の非常にインパクトの大きかった授業を折に触れ思い出します。

五

一九四九（昭和二四）年二学期の単元「級雑誌の作り方」は、文集「たけ」として結実以降、①学級文集、学年文集、卒業文集の編集に展開したほか、②学校誌「石川台」の画期的な改革、③創造性に培う「個人文集——私の本」の編集へと発展していった。

単元「読書」における「読書新聞」の編集は、「読書生活通信」に発展する過程で、①「読書生活を豊かにする」（『中学総合国語』の「読書新聞 第一号〜第三号」（前出））、②紅葉川中学校における、単元「新聞」（ア 新聞の読み方、イ 新聞の編集 一九五一・五二年度）③単元「新聞」（国語 中学校用）（西尾実編、筑摩書房、一九五六年）など、自己を育てる読書生活指導の根源となり、さらに、④石川台中学校における数多くの「新聞に学ぶ」実践に具現した。これは、現代のNIE活動の源流となる実践であり、新聞を／新聞で／新聞から「学ぶ」を超えて、新聞本来の開拓・批判精神に学ぶ実践でもあった。い

ずれも前人未踏の類例をみない営みである。

さらに、学習中に記されてきた「読書日記」は、工夫を重ねられた「読書生活の記録」、及び、「個人文集」のなかの、さまざまな自己をみつめる文章・記録として発展を遂げていく。各単元の営みそれぞれが、大村教室における「自己を育てる」教育の根幹をなす学習となっている。

このような「主体的に自己を向上させていく」指導は、ある時、ある特定の時期だけに行われるのではなく、年間の単元学習を縫って、自己をみつめさせ、自己を啓発していくように日常的継続的に行われてきた。たとえば『国語 一上』（西尾実編 筑摩書房 一九五七年）収録の「読書ノート」には、次のような例が付されている。^(注5)

世界の子ども 西ヨーロッパ編1、フランス

（前略）

4 学習との関係

○社会科の学習といるいろいろ関係がある。次のような題目で、話しあったり、調べたりすることには、ことに役に立つと思う。

1 フランス（外国・世界）の子どもたちの実際の生活

家でどんな手伝いをしているか。

どんな遊びをしているか。

学校ではどんなふうに学習しているか。

どんなことを、おもに話しあっているか。

2 自分たちが、これから生活を改善していくのに参考に
なるのは、どういうことであるか。

○(前略) こどもが、番をしていた畑の麦を牛に食われ
てしまつて、しかれるところがある。そのしかるこ
とはなど、日本とはたいへんちがう。

5 感想

○(略)

○どこにも、苦しい生活があり、苦しんでいる人が多いもの
だ、かわいそうなこどもは、どこにもいるものだ、と思つ
た。また、実にいろいろな生活があり、それぞれの所で、
いろいろな人が、いろいろなことをしているものだと思つ
た。

今まで、フランスとかパリとかいうことばからえがいて
いたものとは、たいへんちがった、フランスの姿を見せて
もらったという気がする。

また、「大うずまき」の例では、「死ぬか生きるかのときにな
ると、人はだれでも、この兄のように、恐ろしい自己中心になつ
てしまうことがあるものだろうか。」「今まで読んだものでは、
ぎりぎりの場合にひとのために身をすてる話が多かった。今、
これを読んで、なにか胸をつかれて恐ろしくなった。しかし、
いやなのではない。今までとちがった、今までより強い、異様
な感動を受けた。」「この人は、ひかえめに自分のことを話して

いるが、とても偉い人のような気がする。」と記されている。

また、「大うずまき」の「もうとうていだめだときまつてし
まつたら、かえつて気持がおちついて、恐ろしさもだいぶうす
らいできました。」との表現について、『おちついてきた』の
を『あきらめて無気力になった』と誤解させないようにしなけ
ればならない。おちついてきた心もちが、どんなことばに表現
されているか、そのことばをはつきりおさえて、そのことばが
なかった場合、他の語であつた場合と比べながら考えさせる。」
と手びきされている。

六

大村はま教室における「自分で自分を育てる」教育の中核を
なすのは、「読書生活の指導」と、学習のすべてを書くことに
収斂していく「学習記録の指導」である。前者の目標は、次の
五項目に集約される。

一、読書の意義を自覚させ、読書意欲を高める。——自己を開
発し、自己を豊かにする読書。問題解決のため、問題発見の
ための読書。休ませ、楽しませる読書。

自己を豊かにする読書、問題解決のための読書、休ませ
楽しみを得させる読書は、従来、考えられていた読書の世
界であるが、これからの読書は、それだけでは、積極的な
意義に乏しいと思う。読書ということが、生きぬく力とし

て、第一線にたつものとはなくなりそうである。

自己を豊かにするだけでなく、自己を開発するものとしての読書を大切にしたい。読んだために、新しい自分が開発されていくところに、読書の意義を見いだして、読書することの目あてに数えたい。

問題解決のための読書（中略）は、読書の大きな部分を占めている。これからも、ますますこの目的のための読書が多くなっていくであろう。それとともに、これからは、問題発見のための読書、本を読んで、新しい問題を発見する（中略）ことは、読書という活動をするねらいの一つであるはずである。読書という活動は、そういう積極的な、生産的な活動である。

二、読書する習慣を身につけさせる。

（略）

三、目的に応じて適切な本を選んで読む態度を身につけさせる。

（略）

四、読書の方法・技術を身につけさせる。

（前略）目的に応じた、いろいろの読み方、技術を身につけ、書物を活用しなければならない。本を選ぶための方法・技術もあり、選んだ本を、ざっと読む方法・技術も、くわしく読む方法・技術もそれぞれにあつて、それを身につけていかなければならない。同じく「速く読む」といってもそれは一種類ではない。

五、読書に関する知識を整理し、豊かな読書生活を確立させる。

（前略）たとえば、本を選ぶにしても、どのような施設があるか、その利用のしかた、どのような目録があつて、どのようにして手に入れられるか、などの知識が必要である。（中略）記録のしかた、その整理の問題、スクラップの問題、読書会の問題など、豊かな読書生活のためには、本を手にとって読むこと以外のさまざまな知識が必要である。

大村はま先生は、上記五項目のうち、「問題発見のための読書活動 生産的な活動」をたえず意図し重視してこられた。「自分で自分を育てる」教育の原点といえる。

一九六六年度からの「読書生活通信」と、月ごとの単元『読書』（いわゆる「帯単元 読書」）を契機とする「読書生活の『てびき』」による「読書生活の指導」が、その後の「自己を育てる」教育の『深化』につながっていく。

○ 補

一九四九（昭和二四）年第二学年二学期の単元「読書」の教材に「読書新聞」の編集が組み込まれたのは、当時の読書指導が「読書紹介」と「読後の感想文の指導」に偏っていた実情を変革し、「読書生活の指導」を意図されたものであつた。その編集企画のなかに漫画がとりあげられている。（原倭子「学習記録 単元『読書』」五ページ）

滑川道夫氏は、漫画は人間の機微をつく、風刺のあるもので

読んでもよいと記し、ただしとして、条件を三つ付けている。「①量を制限する。漫画はおやつで、ご飯を食べてから読む。②良い漫画を選ぶ。ア 絵を見て、見ごたえのあるもの。(中略)ウ ことはが下品でないか。(中略)カ 内容がでたらめでないか。キ 民主主義的な精神に反していないか。ク 平和を愛しているか。(中略)コ 何かを風刺しているか。③ 批判的に読む。」さらに、二つの意見を述べ、最後に、「漫画を読みすぎると、やさしいものしかできなくなる、我慢できない心になってしまう^(注9)」と結んでいる。

この考えを生かして、翌年の大村はま教室においては条件にてらして、グループごとに当時生徒たちに読まれていた漫画・五種(生活漫画「さざえさん」など二、外国漫画、動物漫画、探偵漫画)を取りあげ、一一項目についてプラス二から、マイナス二の評価がなされている。「次ページ(別表)」

(一九五〇年度三学年二学期 単元「読書の技術」(原俊子「学習記録」プリント四) 及び金子美恵「学習記録・読書の技術」による)

注

- (1) 鳴門教育大学付属図書館「大村はま文庫」蔵。
- (2) 「読書の技術と方法」と見出しをつけた学習者もあり。
- (3) NIE学会 橋本講演二〇一一。ここでは省略。
- (4) 二〇〇一年一月二一―一五日 松山市講演。同年一二月

一―三日 広島・鳴門講演など。

(5) 『国語 一上』西尾実編、筑摩書房、一九五六年、一六九―一七〇頁

(6) 前掲書、一七四―一七五頁

(7) 『国語 学習指導の研究 一上』西尾実編、筑摩書房、一九五七年、一〇三―一〇四頁

(8) 『大村はま国語教室 別巻』筑摩書房、一九八五年、二六三―二六四頁

(9) 滑川道夫「漫画の読み方」(講談社『マンガ集』付録)

* 本稿は、第十回大村はま記念国語教育の会秋田大会(二〇一三年一月二三日)報告資料を補訂し、説明を加えたものである。

(二〇一四年一月七日稿)
(はしもと のぶお・元本学教員)

〔別表〕「漫画についての評価」表

〔大村はま実践 単元「読書の技術」目黒八中三年学二学期 一九五〇（昭和二五）年〕

【漫画についての相互評価（Hグループ）】

書名	さざえさん 5	デコちゃん ロクちゃん	ルーパと ふしぎなくに	ボコスケの旅	黄金地獄谷
作者	長谷川町子	柳 正雄	ロンドンデリー	花埜原芳明	日活劇
出版社	姉妹社	子供エホン社	講談社	愛育書院	新精社
種類	生活漫画	生活漫画	外国漫画	動物漫画	探偵漫画
項目					
1 絵に品があるか	+ 2	0	+ 2	0	- 2
2 絵がよく見ると一層おもしろくなるような手応えのあるものか	+ 2	0		0	- 2
3 印刷がはっきりと美しいか	+ 2	+ 1	+ 2	+ 2	0
4 ことばが下品でないか					- 1
5 ことばが絵の説明に終わらず協和しているか	+ 2	0	+ 2	- 1	- 1
6 ことばが簡明であるか	+ 2	0		0	- 1
7 内容がでたらめでないか		- 1		- 1	- 2
8 内容が民主精神に反しないか				- 1	
9 内容が平和建設の精神に反しないか				- 1	
10 おもしろいか	+ 2	- 1	0 子供っぽい	- 1	- 2
11 なにかを風刺しているか	+ 2	0			

【漫画についての相互評価（Kグループ）】

書名	似たもの 一家	少年川上くん の大ホームラン	ブロンディ	のんきな 父さん	七人の こびと
作者	長谷川町子	榎本進一郎	チャックヤング	立野ひろし	ディズニー
出版社	朝日新聞社	榎本書店	朝日新聞社	国華社	講談社
種類	生活漫画	生活漫画	外国漫画	時代漫画	物語漫画
項目					
1 絵に品があるか	+ 2	0	+ 2	0	+ 2
2 絵がよく見ると一層おもしろくなるような手応えのあるものか	+ 2	- 1	+ 2	0	+ 2
3 印刷がはっきりと美しいか	+ 2	- 1	+ 2	- 1	+ 2
4 ことばが下品でないか					
5 ことばが絵の説明に終わらず協和しているか	+ 2	0	+ 2	0	+ 2
6 ことばが簡明であるか	+ 2	0	+ 2	0	+ 2
7 内容がでたらめでないか					
8 内容が民主精神に反しないか					
9 内容が平和建設の精神に反しないか					
10 おもしろいか	+ 2	- 1	+ 2	0	+ 2
11 なにかを風刺しているか	+ 2	0	+ 1		+ 2

○単元「読書の技術」の実践では、上記のように一グループが五冊の漫画を担当して、1～11の項目で、+ 2から- 2の五段階で評価をさせていられる。各グループとも恣意的主観的にならず、説得力のある評価をしている〔+ 2から- 2の五段階の評価も絶妙である。〕

○2013年に、「はだしのゲン」を図書室から遠ざける動きがあった。こうした工夫された項目で学習者自身に評価活動をさせると適切な方向が得られる。